さざなみ国語教室
第462号　2020年９月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

マスクと「聞く」こと

石川　教夫

マスクというともはや予防用具のマスクのほか思いつかなくなりましたが、maskの元来の意味は「仮面」です。「仮面」は本来それが表示するものになる道具ですが、終日マスクをしていると自分を隠す「覆面」の気がしてきます。

「突然の来客の時マスクあると助かるわ」とは我が妻の言ですが、隠せるのは素の顔だけではありません。表情も隠せます。表情は感情に繋がっています。感情は、私そのもの、生(なま)の自分でもあります。

高校の教員をしていた時、卒業まで一度もマスクを外さなかった女生徒がいました。彼女は、生(なま)の自分をマスクの下に隠したかったのかもしれないし、自分を守りたかったのかもしれません。

マスクはこのように心理的なアイテムにもなるようです。しかしコロナ感染においては、予防という機能自体が相当重要なはたらきをしています。感染の不安と死の恐怖が蔓延し、過剰とも思える予防策や同調圧力がそれらを助長しています。今起こっている誹謗中傷や偏見・排除あるいは〝自粛警察〟という問題行動の背景にも同じ要因があると考えられます。

それはさておき、これほどマスク着用が長期間に及んでくると、マスクを外し辛い人がでてきても不思議ではありません。思春期の子どもであればなおさらです。

「たかがマスク、されどマスク」です。しかもその要因には心理的な要素もさることながら死の恐怖という実存的宗教的な要素が潜んでいるかもしれません。ですから、マスクの着脱をためらっている子どもがいたら、ぜひ話を聞いてあげてほしいと思います。

ところで、「聞く」ということですが、その大切さはすでにご存知の通りです。私は「聞く」をモットーに教育相談をしてきました。でも、なかなか聞けないものです。いったい「聞く」とはどういうことかと迷いながら子どもたちと出会い続けてきました。その経験を通して気付いたことを一、二お伝えしたいと思います。

一つは時間です。まずは五分を確保したいものです。というのは「先生が私のためにだけ時間を割いてくれた」と子どもが実感するには五分は必要だと思うからです。聞く側も五分なら多忙の中で何とか取れるし集中もできるからです。

とはいえ個室で対面となると、子どもも緊張して話せなくなるものです。学校には学校にしかない相談空間があります。廊下を歩きながら、草を引きながら、掃除をしながら等、その方がリラックスもできます。話ができるようになれば徐々に時間を伸ばし、個室に移っていけばよいと思います。

話を聞く時の心構えですが、とにかく子どもが語るままを尊重することです。大人からすれば些細な内容でも、その子にとっては世界そのものであり、それを言葉に紡ぎ出してくれているからです。

マスク着用はいつまで続くのでしょう。気の重いことですが、それを逆手にとって、子どもたちの内的世界に触れていく機縁にできればと願っています。

（浄土真宗本願寺派永順寺住職
日本学校教育相談学会
学校カウンセラー）

さざなみ

▼３年の理科「風やゴムのはたらき」の目標は、「風やゴムの働きについて興味・関心をもって追究する活動を通して、風やゴムの力を働かせたときの現象の違いを比較する能力を育てる」である。参観をした授業は、風で走る車「ウインドカー」やゴムで走る「ゴムダッシュカー」やプロペラカーを作って学習をするという時間▼子ども達の手元には、理科実験教材とした小さな箱が配布されていた。先生が、使い方や注意事項を説明しようとすると、「先生、ぼくらで考えさせてください」と注文をする子がいた。先生は、その子を指名した。その子は、箱の表と裏、横を見ながら、これから作る車を先生に確かめ、箱の中のものを出したいという気持ち伝えた▼その授業は、子ども達の車を作りたいという気持ちを大事にしながら、先ず、一人で、説明書を読む、次に、作り方を確認する、その後、説明書の順番に組み立てるという手順で学習活動が進んでいった。説明の文章を読み返したり、できている子に質問をして、実験をするところまで子どもの力で進んでいった▼車を作ることが目的であったが、図を理解し説明の文章を正しく読むことの学習の力が発揮できた時間だった。説明を聞いて作るという手堅い方法もあるが、説明書の活用がこの時代の子にあっているように思えた。

（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

詩ってすごいな

北川　雅士

８月２１日、例年よりも少し早く夏休みが終わり、子ども達が教室に帰ってきた。２学期の国語科の学習は、まど・みちおさんの「せんねんまんねん」の詩を読みながら詩を味わう学習からスタートした。

まず導入で「せんねんまんねん」を声を出さずに読み、ノートに視写した。視写できた児童から自分の書いた「せんねんまんねん」を読み、自分で工夫されていると感じた部分に赤で線を引いた。同時に、詩の中で疑問に感じた部分や、不思議に感じた部分に波線を引くように指示した。

しばらく時間をとったあと、ペアでの交流の時間をとった。この時間の目的は、赤線を引いた部分の共有と、波線についての課題解決、ペアで話し合いながら波線を引いたところを話し合った。その中で、ペアだけでは解決できないことがいくつか出てきたため、全体で話し合うこととなった。まず、赤線を引いた場所を黒板に視写した詩に書き込んでいき、どのような工夫があったのかを話し合った。そのあとで、波線を引いた部分をみんなで話し合った。一人目の児童が「せんねんまんねんという題名がまずわからない」ということを発言したのでみんなで題名から考え始めた。

「漢字で書いたらどうなる?」「千年万年」

「何が千年万年なんやろ」

「ヤシの木が育つのに千年」「水がのぼるまで」「ワニが川にのまれるまで」「万年は一万年」

「長い時間・・あっ長い短いの長いや」「じゃあ短いは何が短いんやろ」

など、とどんどん話が広がった。そのなかで、「くりかえすことが数千年から数万年続いている」という意見と赤線を引きながら工夫として取り上げた「くりかえす」という話題がつながった。また、この詩の中で表現される「くりかえす」ということが単なる詩の工夫だけではないということにも児童は驚いていた。

次の時間には、自分たちも詩を書いてみたのだが、「言葉を選ぶ」「表現を工夫する」ということの難しさを改めて感じていたようだった。この学習をきっかけに詩を読む際に言葉にこめられているものに興味をもつようになれたらいいなと思う。

（彦根市立城南小学校）

今　求められている力

西條　陽之

新型コロナウイルス感染防止対策のため、これまでのようないわゆる話し合い活動に取り組みにくい状況にある。「山小屋で三日間すごすなら」（光村図書３上）は思考力、判断力、表現力等における「Ａ話すこと・聞くこと」の指導を目的とした単元であるが、話し合いをどのように行えば良いだろうか。

一つには、できないことばかりに注目しないことである。「向かい合って話し合いはできないけれど、どうしたらいいでしょうか。」と子どもたちに問うてみると、「横に並んだまま話せばいい」「（間隔を空けている）今の席から話し合えばいい」など、今の状況に合わせた“できること”をしっかりと見つけている。各校で感染防止や安全確保について、教師からはもちろん、委員会活動などの児童会活動でも注意喚起を積極的に行なっていることと思う。その上で、子どもたちと共にニューノーマルを考え、築いていくことが求められている。

もう一つには、向かい合って話し合うことだけが対話ではないということだ。対話には、自分と友達、自分とみんな、自分と自分というように考えを広げ深めるための対象がいくつも存在すると考える。その中でも、自分自身との対話を深めるために、「書くこと」に重点を置きたい。私の学級では一人一枚のホワイトボードを用意している。B4の用紙にマス目を印刷して、ラミネート加工したもので、雑巾を4等分に切ってイレーザー替わりにしている。山小屋へ持っていきたい物を出し合う場面では、ホワイトボードに書いたものを黒板に貼っていき、必要性や理由を説明しながら考えを整理していった。友だちのホワイトボードを見ながら、同じ意見や似た意見など仲間分けをしていくことで、考えの自己対話を深めていくことができた。合意形成の場面でも、肯定的な意見が多いものからピラミッド状に並べていくことで大事なことを視覚的に捉えていった。

今までの常識をリフレーミングしたり、教具を少し工夫したりすることで、変化に対応していく。子どもたちはまさに柔軟的発想を引き出す名人である。最終的な安全保障は大人の義務であるとして、この窮屈さの殻を打ち破るヒントは彼らの自由で伸び伸びとした姿にあるのだと思う。

（大津市立小野小学校）

作文の実践
反省と次に向けて

川端　由起

北島先生がまとめられた「作文十二か月」の本を昨年いただいた。国語科の指導項目と並行して作文を指導されており、かつ年間を通していろいろな文章を書かせていらっしゃる。そして、何より作文を通して子どもが成長しているのがわかり、私も北島先生のような実践をしたいと真摯に思ったのである。

縁とは奇妙なもので、今年から私は北島先生の以前の勤務校に勤務することになった。コロナの影響もあり、本格的な授業は六月からとなった。朝の学習タイムで週に一度作文の時間が割り当てられており、私はここで作文を徹底的に鍛えようと考え、意気揚々としていた。

まず、最初に取り組んだのは、所謂「変身作文」である。最初は、「もし私（ぼく）がドラえもんだったら」というテーマで書かせた。すると、「私（ぼく）がドラえもんだったら、タイムマシーンに乗って恐竜がいた時代に行ってみたい。そして恐竜と遊びたい。」という内容で終わる児童がほとんどで、ドラえもんの道具を使ってわくわくする冒険をするという話は出てこない。発想の広がりが全くないことに驚きを覚えた。

また、同じ月に、変身作文２回目と題して、「もしも私（ぼく）が〇〇だったら」という題で作文を書かせた。おもしろいのもいくつかあったが、圧倒的に多かったのは、「私（ぼく）がもしペンギンだったら、氷の上を滑ってみたいです。なぜなら、氷はつめたいから滑ったら気持ちがいいのかなと思ったからです。ペンギンだった暑い日でも、涼しいけど、寒い日はペンギンはどうなんだろうと、あとふしぎに思います。ペンギンになって寒い日を体験してみたいです。」（４年の児童）というような作文ばかりだったのである。

私は、変身作文であれば、簡単に面白いものが書け、創造性に富んだ作品が出来るだろうと高を括っていたのであるが、それが見事に外れたのである。７月になり、さざなみの会でに出席をし、北島先生の実践の資料をいただいた。そこで、私はあることに気がついたのである。北島先生は、作文に大切なのは、「何を書くか」「どのように書くか」とされていた。私は「何を書くか-文章の種類、題材」は児童には伝わっていた。次のどのように-学習過程（書き上げるまでの手順）が児童には全く伝わっていなかったのだと確信したのである。変身作文であれば、誰からの視点で作文を書くのか、（視点人物）その主人公とするものは、何が見えてて、何ができて、何が好きなのかなどの材料集めなどの構成が全くできていなかったのである。短作文の練習でも、構成をまず最初に考えることの大切さを改めて気づかされた。

（草津市立志津小学校）

「花畑は悲しい所」

岡嶋　大輔

三年生の教室。「ちいちゃんのかげおくり」（光村図書三年下）を扱い、場面を比べて感じたことを出し合ったりまとめたりする学習をした。

単元の後半、第四場面「きらきらわらいだしました」と第五場面「きらきらわらい声を上げ」とを比べて気付いたことを出し合った。「第四場面ではちいちゃん、第五場面ではお兄ちゃんやちいちゃんぐらいの子どもたちがきらきら笑っている」といったように、どんどんその違いが出された。

途中、場所の違いについても話題にあがった。

「場面四の場所は花畑で、場面五の場所は小さな公園です。」

「私は、花畑は天国と言いかえてもいいと思います。」

「場面四の花畑は悲しい所で、場面五の公園は楽しい所です。」

「えっ、花畑は楽しいところじゃないの。」

「ちいちゃんは、楽しかったり嬉しかったりするからきらきら笑っているのでしょ。」

「家族とやっと会えたのだから、嬉しくてきらきら笑いだしたのだと思います。」

「花畑は悲しい所」という意見が押され気味ではあったが、

「読んでいる人が悲しい。」

という発言があった。そして別の子が、

「ちいちゃんは、家族に会えたと思って嬉しいのだけど、本当には会えていないし、命がきえるのだから、やっぱり悲しい。」

と続けた。

私は、「ちいちゃん」「読んでいる人（読者）」の二つを並べて板書し、それぞれの気持ちとその理由を確認してまとめた。ちいちゃんは「うれしい」「幸せ」といった言葉、読者は「かなしい」「かわいそう」といった言葉が出された。

初発の感想では「最後に家族に会えてよかった。」といった感想が圧倒的に多かったが、授業の最後に書いた感想では、

「家族みんなの命がきえたのに、家族に天国で会えてうれしそうなちいちゃんを見てかなしいと思った。」

「ちいちゃんがよろこんでいてよかったと思う気持ちと、本当は家族と生きて会える方がいいという気持ちとがまざっている。」

といったように、中心人物への感情移入だけでなく、「その人物をみてどう思うのか」と読者の視点からも書かれているものが多くあった。

異なる場面にある同じ言葉を比べることで、その言葉の奥にある意味を読み取ることにつながった。そして、読み取った意味を出し合うことで、そこにもまた違いが生まれた。その違いを分かり合おうとするところに、新たな視点を獲得する学びがあるのだなと感じた授業場面であった。

（野洲市立北野小学校）

新しい学級で

北島　雅晴

退職後、いくつかの学校で臨時講師として勤めてきました。九月中旬より新しい学校で、二年生の担任をすることになりました。勤務が始まる前の週に、子どもたちの様子を参観させていただきました。感染症対策下、どのように学習を進めているのか知りたかったからです。

マスクで顔の半分が隠れてしまう中でも、落ち着いて学習を進めていたので安心しました。自分自身が思い描いていたことと違う様子がいくつかありました。

①教室の前に出て発言する子の声が意外とよく聞こえること。

マスクをしていると声が聞き取りにくいと思っていましたが、そうでもなさそうです。これならば、独話（スピーチ）も可能だと感じました。

②子どもと話をする時に、やや心的距離を感じること。

「先生、もう一度名前を教えてください。」

「ぼくのお母さんも学校で働いているんやで。」

等、いろいろと話しかけてくれるのですが、何となく表情が読み取りにくいためか、思いが伝わりにくいこともあるのではないかと感じました。

③一つひとつの動作が若干ゆったりすること。

マスクをして行動するのが原因なのか、大声を出したり、走り回ったりすることが少なくなるようです。感染症対策を行いながらも二年生らしい元気さを出すための工夫が必要だと思いました。

五月末からこの学級で積み上がられてきたことを大切にしながらも、子どもたちをどのように育てていったらよいのか、少しずつ見通しを立てていきたいと思います。

出来ないことを嘆くのではなく、今だからこそできることを充実させていきたいです。

①本を読むことに目を向けさせること。

自宅にある（絵）本の中から、二年生に読んで聞かせたいものをいくつか選びました。教室の前に子どもたちを集めて読むことは避けたいので、一番後ろの子にも見えるように絵が大きくてはっきりとした絵本にしました。マスクをしながら絵本を読んだことがないので、読み語りの練習もしました。それから、毎週図書室に行って本を借りる場を設けようと考えています。軌道に乗ったら、お勧めの本を紹介する学習もしたい、親子読書を保護者にお願いできないだろうか等、やりたいことがどんどんふくらんできます。

②書くことを中心に学習を進めること。

国語科では、書く活動を中心とした学習にしたいとぼんやりと考えています。物語ならば、お話の大体（あらすじ）や読んだ感想がきちんと書いてある学習帳をどの子もが完成できるような力をつけたいです。

③書くこと（作文）の学習から始めること。

まだ思いつきの段階ですが、「わたしのすきな〇〇」という題材で、書く学習を設定したいと思っています。〇〇のところには、人・こと・もの等が入ります。自分の身近なすきな〇〇集めやその交流を行いながら、作文を書くという学習です。一人ひとりの子がどんなことに関心をもっているのか、子どものことを知るきっかけにもなるだろうという教師の意図もあります。

今までは、毎日歌をうたってきましたが、はたしてできるのだろうか。日記もどんどん書かせたいのだが。いろいろやりたいことがあるのですが、子どもの様子を見ながら、無理なく進めていきたいと思っているところです。

（栗東市立大宝小学校）

編集後記

▼八月例会（四百六十一回）は、計画では、「国語研究集団合同研究会」及び「吉永幸司の国語教室ＩＮ京女」に参加の予定であった。が、新型コロナウィルス感染予防をためいずれも早々に中止を決定。会員それぞれの実践と研究をまとめるということにした。研究は第二段階に入る▼本年度の研究主題は『深い学びと書くこと』の実践的改善と開発」。第二段階は①指導過程・方法・評価の開発と蓄積になる。研究内容は指導過程・指導方法と評価の観点を明らかにする②書く力を伸ばし、「深い学び」を実現する方策を生み出すである。▼最近、急速な時代の変容を感じる出来事が多い。加えて、自己存在の希薄や自己存在について問われることが多くなってきた。個人の自己確認、自己開拓の有力な手段として「書くこと」つまり、「よりよく生きるために書く」ことの価値を見い出すことが大事であると考えるようになった▼国語科の学習活動で「主体的」とは何かを考える時、「書くこと」の視点が具体的で分かりやすい。自分の思考や判断が伴うからである。それは、書かせればいいというのではなく、「書く前」の指導が深い学びと繋がってくる。丁寧な書く前の指導により、書きたいことが生まれる状況を作り出す必要がある。ただ、書くことと友達を介した「対話的」との関わりは、これからの課題である。▼巻頭には、石川教夫先生より玉稿を賜りました。深謝。

（吉永幸司）